

とかく調へられ不申其儘越候間、御推量にて御讀可有之候。

博施濟衆章、闇齋說中泉氏より出申候。筆記の物御覽候處に、異說難被意得候由、如何の説に候哉。此章もとより朱子の註明白、且又語類等にも委細相見え無疑事にて候。闇齋說餘り見申度も無之候。御寫給ふには及不申候。定て集註の説と不合ものと存候。惣て頃日も論語を講じ候て、ふと存付申候。子不語怪力亂神章、集註に鬼神造化の迹不正にては無之候得共、學者の違に難聞事に候故、御語り不被成候由相見え申候。竊に集註此説に疑有之候。此章の神は、怪力亂神と同じく不正の神に候故、聖人御語り不被成候。若造化の迹と見候はゞ、聖人御語り不被成とは難申候。中庸鬼神の章、又は祭義等の説、聖人成程御語被成候。此章の神は符瑞妖孽の類を可申候。只今俗の符水祈禱したる類にて御座候。是も元來天地鬼神の餘波變じたる物に候へ共、既に邪正分申上にては混じ難く候。たとへば義利の利も、元來元亨利貞より出候て、義の和より變じて私欲に成たる物にて候故、同じく利と申候得共、義利の利をば義の和とは

釋し申間敷候。美惡不嫌同辭は、春秋の法に候へば、かやうの所は急度分ち候て、混じ不申様にいたし度物にて候。然故大學の誠意は、意は心の所發と釋せられ候得共、絶四の意をば意は私意也と釋せられ候。今不語怪力亂神の神も、天地の鬼神混じ説申事有間敷儀と存候。愚見不圖如此存候得共、其上にて存候は、我等躬の者、初は程朱の説を信じて義理を講じ〜いたし候て、程朱の影にて義理の筋よほど見え申候へば、反て程朱の説に疑出來申候。是は程朱の見所へ未徹故にて候。今一段こぎぬき申候はゞ、か様の疑暗候て、程朱の説と少しも同異有間敷かと存候。先づそれ迄は疑て居候迄にて、にはかに己が見をよしとは定申間敷事にて候。孔子賢於堯舜と申儀も、程朱の説は聖徳に違は無之候得共、事功を以て申たるとの事に御座候。是も愚見は少し違申候。孔子の功堯舜より賢り申事は勿論にて候得共、宰我・有若・子貢の被申候は、孔子の材力氣魄の、聖人の中にも別て廣大なる所を以て被申候。生民以來孔子のごときはあらずと申事、孔子の功を被申とはかりは難申候。事功は則材の所爲に候得共、材力と申内には徳も

不外候。材ほどに徳も應じ申管にて候。禹入聖域不倂と

申候も、渾然天理一毫人欲なきは、禹も同事にて聖人にて候得共、氣配精神おとり申候故不倂と申候。たとへば天より受たる性分は、千金のごとく毛頭も交り無之、千金共に精金なるは聖人也。其内に千金に餘計有之もあり、又千金僅に足るも有之、其分量の有餘不足の所にて評論したる事と存候。然るをたゞ一通りに事功を以て論じ候ては、あらかき様に存候へども、是も先づ疑て居申ばかりにて未決に候。此説は先頃孝七に語候へば、孝七も兼て疑有之候へ共、決し不申候處に、愚見承候て安堵いたし候由申候。

一、青地氏新居風景好く候由

青地氏新居の記も、先日藤太夫殿より被指越見申候。大方宜敷相見え申候。青地氏新居風景好く候由、繪圖被越さながら見申様に御座候。其後又書狀給候。婚嫁共に相濟、新婿新婦を被得候て大慶の由被申越、扱て珍重成儀にて候。御老母大慶察入申候。藤太夫殿も何に不過孝行大慶と存候。以上。

十二月二十三日

室 新助

大地新八郎様

一、室鳩巢の詩

歲暮有感三首 先生時七十二歲

歲暮寒稍薄。春歸一草堂。雪消當白日。雲暖近青陽。病覓

三年艾。老添兩鬢霜。世榮非我志。何必擬馮唐。

日月如崩角。偏驚短景催。歲將殘雪盡。春入早梅來。多

病惟高枕。忘憂好對杯。漢家當上計。能得幾人材。漢時鄧國

一自辭藩府。忽經二十年。新知同好少。舊學爲誰傳。身老

餘書癖。家貧足酒錢。病來無俗務。歲月自推遷。

除夜作二首

元日明朝是。一年今夜殘。金爐烟泛灑。蘭燭淚闌干。栢葉初

隨酒。五辛試上盤。老夫非守歲。自是欲眠難。

玉帛三朝會。金門向曙開。欄星城影動。遙夜漏聲催。列炬連

雲見。鳴鑼擁路來。自悲違大禮。抱病未趨階。

庚戌歲初病中書懷三首

東海瑞雲曙色收。扶桑日上鳳凰樓。宮根關口群山合。日本橋邊百道流。積德宜論周禮樂。有年誰續魯春秋。偏勞黃閣